



Title	タイ・チュラーロンコーン大学での日本語教育実習報告
Author(s)	池内, 優香
Citation	日本語講座年報. 2025, 2023-2024, p. 29-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102673
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

タイ・チュラーロンコーン大学での日本語教育実習報告

池内 優香

1. はじめに

筆者は2023年6月から2024年3月までの約10ヶ月間、タイにあるチュラーロンコーン大学にて日本語教育実習の機会をいただいた。筆者にとってタイへ行くのは初めてであったが、海外での日本語教育実習も初めての経験であった。本稿では、この教育実習について報告する。

2. チュラーロンコーン大学について

チュラーロンコーン大学は、1917年に設立されたタイで最初の高等教育機関であり、最も古い歴史を有する国立大学である（科学技術振興機構HP）。19の学部を有しており（チュラーロンコーン大学HP）、筆者は、文学部東洋言語学科日本語講座にて実習を行なった。

東洋言語学科に所属する日本語専攻の学生、および、副専攻として日本語を学習する学生の数は以下の表1の通りである。

表1 チュラーロンコーン大学日本語学習者数

(2024年1月時点)

クラス名	学年等	人数
日本語専攻	1年生	55人
日本語専攻(主専攻)	2年生	34人
日本語専攻(主専攻)	3年生	29人
日本語専攻(主専攻)	4年生	38人
日本語副専攻	N4以上	80人

アカデミックイヤーは、前期が8月初旬から12月初旬、後期が1月初旬から5月初旬である。

バンコクの中心地に位置しており、立地がとても良い。筆者が実習期間中に滞在していた学生寮もキャンパスの敷地内にあり、文学部までは徒歩で約20分、学内を走る無料バスでは約5分で行くことができる。この学内バスは運行状況を確認できるアプリもあり、非常に便利であった。

3. 実習内容

筆者の実習内容は大きく分けて、チュラーロンコーン大学の学部学生向けの授業、外部の社会人向け

日本語コース、日本語講座公式Facebookのコンテンツ制作であった。この他にも、課外学習や他大学のイベントへの参加の機会も得た。これについては、4章で詳述する。

3.1. 学部学生向け授業

①日本語副専攻学生向け会話授業

前期は、ユッパワン先生ご担当の日本語副専攻学生向けの授業に、TAとして参加した。教材は先生のオリジナル教材で、「勧誘—返答」「依頼—応答」などといった機能別で構成されている。授業の流れは以下の通りである。タイ語で導入がされた後、練習問題を行う。授業後、学習した内容のロールプレイ（以下、RP）を作成する課題が出され、学生は、次回授業までにスクリプトを提出する。次回授業の冒頭で課題のRPを発表し、それに対しフィードバック（以下、FB）を行うという流れである。筆者は、このうち、テキストにある練習問題、RPの場面作成、RPの添削およびFBを担当した。

毎回の授業の他に、中間・期末試験の問題作成や採点、口頭試験のロールプレイの相手役など、試験に関わるさまざまなことをさせていただいた。筆者にとってテストの作成や採点は初めての経験であったため、テスト作成時の注意点や採点基準の設定など、細かいところまで考えられていることに気づかされた。日本では学生側の立場でしか経験がない筆者にとって、このように教師側の立場を経験できることは、とても貴重な経験であった。

基本的にはTAとして上述した内容を担当したが、筆者一人で授業を担当する機会も与えていただいた。普段はタイ語でのサポートがある中での授業であったため、日本語のみでの授業で学生にしっかりと伝わるか、学生がついてこられるか、不安も大きかつたが、授業までに何度も先生とも打ち合わせをさせていただき、無事に終えることができた。

②日本語副専攻学生向けビジネスメール授業

後期は、ユッパワン先生ご担当の日本語副専攻のオリジナルの教材で、敬語の確認から始まり、「お知

らせメール」「依頼メール」といったメールの機能別で構成されている。授業の流れは以下の通りである。タイ語での導入がされた後、練習問題を行い、学習した内容をもとにグループでメールを作成し、その場でFBを行う。授業後、ペアで行うメール作成課題が出され、学生は、次回授業までに課題を提出する。次回授業の冒頭で課題のFBを行った後、テスト実施という流れである。筆者は、このうち、テキストにある練習問題、授業時間内にグループで作成するメールとペアでのメール作成課題の添削、テストの採点、およびこれらのFBを担当した。テストの場面設定や採点についても、担当させていただいた。

ビジネスメールは、筆者の研究テーマであるため、実際の教育現場に教師としても携わることができ、筆者にとって非常に貴重な経験となった。はじめは、筆者のビジネスマンとしてのビジネスメールの経験が逆に邪魔をして、どこまでテクニックを教えればいいのか、どこまで間違いを指摘すればいいのか、難しさを感じた。このようなことに悩んでいる時、先生にアドバイスをいただき、テクニックや微妙なニュアンスではなく、受講している学生のレベルに合わせて、これまで書いたことがない日本語のメールが書けるようになるためにどのような指導をすればいいかという点をよく考えた。はじめはうまくできず、学生の反応もイマイチであったが、授業を重ねるごとに少しずつどのように教えればいいか掴むことができた。そして、回を重ねるごとに学生がうまくメールを書けるようになっているのを感じることができた。



写真1 日本語副専攻学生向けビジネスメール授業にて

3.2. 社会人向け日本語コース

東洋言語学科日本語講座が学外の社会人向けに開講している日本語のコースである。5月から8月初旬ごろ、9月から12月初旬ごろ、1月から4月初旬ごろの年3回に分けて開講されている。オンラインと対面で、平日夜と土曜日に開講されている。日本語のレベル別にいくつかのクラスがあり、筆者はその中で、『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を教材として扱っている初級のクラスの会話ドリルを担当した。会話ドリルとは、タイ人の講師が文法導入の授業を何課分か実施した後、学習した課の復習のためのドリルである。1回の授業は90分、120分、180分と、その時々で異なる。分量も、2課分であったり、4課分であったりとさまざまである。基本的にはオンラインでの授業であったが、対面のクラスも4回ほど担当した。そのうち1回は、ご担当の先生の代行をさせていただき、ドリルだけではなく、文型導入などの授業をする機会もいただけた。

受講している皆さんの中年齢や職業、住んでいる場所は様々で、バラエティーに富んだ学習者の方々と接することができた。(日本に住んでいるという方もいらっしゃって驚いた。) クラスによって人数も雰囲気も異なり、元気なクラスもあればシャイなクラスもあった。どんなクラスでも、「日本人と日本語で話せた」という自信を少しでもつけてもらい、「日本語の勉強は楽しい」と思ってもらえるように工夫をした。実際に授業終了後に「楽しかった」と言ってくださった方もいて、うれしかった。

授業準備については、最初の慣れない頃には先生に何度も付き合っていただき、相談に乗っていただけたため、不安なく取り組むことができた。

3.3. Facebookコンテンツ（全18回）制作

日本語の授業以外の主な活動として、日本語講座公式Facebookに載せる日本語に関するコンテンツの制作を行なった。このコンテンツは月に2回のペースで投稿するシリーズであり、企画・立案から制作まで担当させていただいた。どのようなシリーズにするか、どういった媒体のコンテンツにするか、全何回にするかということも全て自分で決めて進めた。筆者は関西出身であるため、それを活かし、「え？なんて？KANSAIBEN」というシリーズ名の動画コンテンツを全18回分作成した。

これまで、自分でアイデアを出し、企画し、スケジュールに沿ってコンテンツを制作するという経験が

なかったため、最初は最後まで続けられるか不安であった。しかし、筆者的好きなようにさせていただきつつも、先生方が毎回チェックしてくださり、的確なコメントをくださったおかげで、最後まで楽しく取り組むことができた。動画のストックがなくなり締め切りに追われることも多々あったが、このシリーズをやりとげることができ、自信に繋がった。

3.4. その他授業等

①BCAC 学生向け日本語授業

チュラーランコーン大学のHPによると、BCACはBachelor of Science in Applied Chemistryの略で、2005年にできた国際プログラムの一つである。日本語講座の先生方は、「理学部のインターのクラス」と呼んでいらっしゃった。

前期に、ここでの日本語の授業のうち5回参加し、授業内のドリルの約20分を担当させていただいた。使用教材は、『みんなの日本語初級I』であり、ひらがな・カタカナからはじまる初級の学生向けの授業であった。授業は英語で進められていた。筆者は大学院入学後に日本語学校で非常勤講師をしてきたが、全て日本語で授業を行ってきたため、英語で行われる授業は初めての経験であり、新鮮であった。

②BALAC 学生向け日本語授業

チュラーランコーン大学のHPによると、BALACはThe Bachelor of Arts Program in Language and Cultureの略であり、2008年にできたチュラーランコーン大学を代表するグローバル・リベラル・アーツ・プログラムで、学部が運営している英語で教えるプログラムである。

前期に、ここでの日本語の授業のうち2回、ドリルの授業を行った。使用教材は、『みんなの日本語初級I』であり、社会人向け日本語コースと同じ要領で進めた。授業は、基本的には直接法で行い、必要に応じて媒介語に英語を使用した。

後期は、チョムナード先生からドリルの動画を作成する機会をいただき、『みんなの日本語初級I』の11、12、13課の会話ドリル動画を作成した。動画は、Zoomの画面録画機能で作成した。1時間程度の動画であるため、飽きが来ないように様々な活動を取り入れ、視聴している学生が実際の授業に参加しているように感じられるように工夫をした。

4. 大学外での活動

①観光のための日本語の課外活動への参加

サンヤー先生のご好意で、観光のための日本語を受講している日本語専攻の学生の、アユタヤへの課外授業に、日本人観光客の役として参加させていただいた。授業で学んだことを一生懸命日本語で説明している学生の姿を見て、実際に観光地に赴いて応用練習をすることで、学生の意欲を向上させることができると感じた。



写真2 観光のための日本語の課外授業にて（アユタヤ）

②ランシット大学「ランシット祭り」の参加

高校生向けにランシット大学で開催された「ランシット祭り」にクイズコーナーの審査員の一人として参加させていただいた。イベントでは、参加している学生たちが日本の文化に関するクイズや歌などを披露したり、日本語を使って作品の紹介等をしたりしていた。これらに取り組む姿を見て、日本語や日本に興味を持ってくれている学生がこんなにもたくさん海外にいるのだと感じることができ、自分自身の日本語教育へのモチベーションを上げることができた。

5. おわりに

今回、日本語教育実習の機会をいただき、大学で教えるということを体験することができた。学生の立場では見ることができない、教師側の立場を見たり聞いたりすることは、今後の筆者自身のキャリアを描くために、とても貴重な機会となった。また、滞在中は日本人講師として現地で働いていらっしゃる先生方にもお会いすることができ、現場での経験や苦労をお聞きすることで、海外の大学で日本人講師として教えるということについてもイメージすることができた。筆者よりもずっと日本語教育の経験

をお持ちのタイ人の先生方が、筆者のところへ日本語の質問に来てくださり、筆者の意見をしっかりと聞いてくださる姿勢には、先生方の向上心の高さを感じ、強く感銘を受けた。

最後に、実習を受け入れてくださりご指導くださったチュラーロンコーン大学のチョムナード先生、ユッパワン先生に感謝申し上げます。魚介類にアレルギーがあり、満足にタイ料理が食べられない私をいつも気遣ってくださり、本当にありがとうございました。わずかな滞在期間中に二度もコロナにかかってしまい、コロナを含めて四度も高熱を出してしまった私を、温かく受け入れてくださり、本当に申し訳なく感じながらも感謝でいっぱいです。実習の内容についても、ユッパワン先生には、研究室に授業前にアポ無しで突撃することも何度もありましたが、それでも「未来の日本語教師のためだから」と、いつも嫌な顔ひとつせず手を止めてアドバイスをくださいり、とても感謝しております。また、パンラナンさんはいつもお世話になりっぱなしでしたが、特にコロナになってしまった時に、たくさん差し入れをしてくださり、本当にありがとうございました。日本人講師として勤務されている渡邊先生にも、タイでの生活のノウハウなど、色々なことを教えていただきました。渡邊先生がいてくださって本当に心強かったです。ありがとうございました。このような機会を与えてくださった筒井先生をはじめとする大阪大学の先生方にも心より感謝申し上げます。

【参考 URL】

科学技術振興機構 HP <https://spap.jst.go.jp/resource/university/2090004.html> (最終閲覧: 2025年1月12日)

チュラーロンコーン大学 HP <https://www.chula.ac.th/en/> (最終閲覧: 2025年1月12日)